

榎 敏明 東京工業大学大学院理工学研究科 教授

共同利用機関としての 分子研



えのき・としあき

1977-1987: 分子研極低温センター助手、1987- : 東京工業大学理学部助教授を経て大学院理工学研究科教授。2003-2004 : 分子研客員教授。物性化学、主として、ナノ炭素材料、分子性物質の電子・磁気物性の研究。これからの日本の科学を担ってゆく大学院生、若手研究者の研究活動の活性化、国際化や将来の展望が持てる環境の整備に向けて努力してゆきたいと思っています。

1977年から1987年の約10年間の間、分子科学研究所に助手としてお世話になりました。その後、2003-2004年は客員教授として分子研の研究活動に参加させていただき、学会等連絡会議委員、また、2006-2007年は運営委員として、分子研の運営の仕事をお手伝いさせていただきました。

助手として着任した時期は分子研の創設期に当たり、分子科学という言葉が真新しかった研究所の建設に参加させていただきしました。その後、分子研の外から分子研を見る立場となりましたが、創設以来約30年間の分子研の移り変わりを見てきたこととなります。その間、分子研自体は勿論、分子研、大学を取り巻く状況が大きく変化し、そこで研究活動に携わる研究者の方々の研究のやり方、考え方も大きく変化したように思います。建設当時の分子研は日本の化学研究のショウウインドウとして位置づけられ、世界に向けて日本の研究の第一線を発信する場となり、また、分子研の超一流の装置を用いた共同研究が重要な役割を担っていました。

その後、大学での研究環境が時代とともに好転し、研究機器が大学に豊富

に設置され、全国共同利用機関としての分子研の役割も変化してきたように思います。ここでは、この30年間の分子研との関わりを通して、分子研について現在感じていることに触れたいと思います。

まず第一は、共同利用施設としての分子研に関することです。1999年頃、分子科学研究所物質開発センターの委員として分子研での共同利用機器の現状についての議論に関ったとき、大学にごく一般的に備えられた汎用的機器が一覧として並んでいることを見て、一時、分子研でこのような共同利用機器を用意する必要があるかと疑問を持ったことがあります。しかし、国立大学が法人化された現在、この様な疑問は必ずしも正しくないことを感じていません。法人化により、競争的資金獲得に大学間の大きな格差が生じ、必ずしも汎用的機器が全ての大学に設置されている状況ではなくなり、また、大学予算の効率的利用の観点からは、大学間、大学と分子研との間で研究者が機器を互いに利用しあうことが必要となっています。その意味で、分子研がイニシアチブをとってスタートした全国の大学が所有する設備を相互利用するため

のプロジェクト「化学系研究設備活用ネットワーク」は、今後の分子研の共同利用施設としての役割として重要なものとなっていると思います。異なる環境におかれた研究者が全国の共同利用機器を自由に使用できるネットワークの仕組みのなかで、分子研が中心的役割を担うことは、化学系の全国共同利用機関として大切な分子研の役割となってくるものと確信しています。

分子研研究会、岡崎コンファレンス等の会議への支援も分子研の重要な活動ですが、この活動も時代とともに大きく変化してきているように思います。最近では科学研究費特定領域研究や様々なプロジェクト関連のシンポジウムが盛んに開催され、情報交換の機会が充分すぎるほどあります。このなかで分子研主催の研究会をどの様に位置付けるかは重要問題であると思います。限られた予算の中で、的を絞って会議を主催する必要があります。日本の化学を代表する共同研究機関として、研究会主催には、分野を超えた学際的な研究領域の活性化、分子科学の新しい分野の創出を積極的に支援するというスタンスも重要なものと思います。

最後に、分子研の中での研究活動に

ついて触れてみたいと思います。創設以来、分子研は化学研究の中心として活発に研究活動を行ってきました。このことは分子研の研究者の研究成果が世界的に高く評価されていることがそのことを物語っています。また、分子研で研究活動を行ってきた研究者の多くが全国の大学、研究機関の研究活動の中での中心的な役割を担っていることも、分子研の高い研究活動の反映であります。しかしながら、現在、このような高い研究活動を支えるための分子研研究者を取り巻く環境が、人員の問題から深刻な状況となっているような気がします。典型的な分子研の研究グループは、グループのヘッドとなる教授或いは准教授と1名の助教を柱として、これにわずかな数の博士研究員、大学院生が加わる極めて小規模なものとなっています。そのことは、各研究グループが十分にその実力を発揮するためには大きな障害となっているように思えます。十分な人的支援のもとに、研究活動が集中的に行える環境を作ってゆくことが必要なものと思います。